

Title	上田自由大学の理念と現実：タカクラ・テルの教育的営為
Sub Title	The concepts and the reality of "The Ueda Jiyu Daigaku" : educational activities of Teru Takakura
Author	米山, 光儀(Yoneyama, Mitsunori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1981
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.21 (1981.), p.11- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000021-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

上田自由大学の理念と現実

——タカクラ・テルの教育的営為——

The Concepts and The Reality of “The Ueda Jiyu Daigaku”

——Educational Activities of Teru Takakura——

米 山 光 儀

Mitsunori Yoneyama

“The Ueda Jiyu Daigaku” was started by Kyoson Tsuchida and country youths of the region in 1921. It continued till 1930, though it was interrupted for two years. There were two important concepts; “independence of education” and “education based on the needs of students.” Though the former concept was realized in the first stage of the Jiyu Daigaku (1921~26), the latter wasn't, for lecturers couldn't take account of other demands placed on students by their daily lives. These concepts were realized by one of the lecturers, Teru Takakura in the last stage (1928~30). He created a new program of study which could answer the students' demands and applied it to farmers. It was through his efforts that the Jiyu Daigaku became a real instrument of education.

はじめに

自由大学運動とは、1920年代はじめから30年代はじめにかけ、民衆の学習意欲に基づいて、長野県を中心に全国各地で展開された教育運動をいう。この運動は、学習する民衆を中心に据え、民衆自らが教育機関を形成していったという点から、我が国戦前における数少ない民衆による、民衆のための教育実践であったと言える。

自由大学運動の本格的検討は、1962年に宮坂広作によってなされた¹⁾。彼は自由大学運動を当時の社会教育の体制化に対抗する民衆の自主的な成人教育運動として評価しながらも、それが「生産労働に内在する問題と講義内容とが遊離するところから、一種の教養主義に転落してしまった。」²⁾とする定説的見解を出した。その後、1960年代末から70年代はじめにかけて日本全国で激しく闘われた大学紛争の抱えていた「大学とは何か」という根元的な問いに答えるべく、自由大学運動研究は盛んに行なわれ、今日に至っている。その中には宮坂の見解を乗り越えようとする動きが見られる。山野晴雄は上田自由大学³⁾に関する一連の論文⁴⁾の中で、昭和恐慌期に上

田自由大学が地域変革に結びついた学習運動として活動していたことを明らかにし、自由大学運動の実践的性格を強調した。しかし、実践と教育との結びつき方の内実を問うまでには至っていない。そこで、この論稿では上田自由大学に素材をしばり、その理念と現実を検討することによって、教育運動としての自由大学像を再構成することにしたい。

1. 上田自由大学の設立

上田自由大学は、小県郡神川村（現・上田市）の蚕種農家の青年・山越脩蔵が1920年9月に新進気鋭の文明批評家・土田杏村を講師に招いて、哲学講習会を開いたことが基礎となっている。この講習会の目的を探るにあたっては、その当時の普選運動をみる必要がある。

大正デモクラシーの風潮の中で、普選を求める声は高くなっており、当時中央においてはそれをめぐって政友会と憲政党が激しく争っていた。普選をめぐる攻防は、中央ばかりでなく地方にも波及していた。蚕業が盛んであったために、いわゆる中産階級が比較的多く存在していた上田小県地方⁵⁾は、大正デモクラシーの影響を強く

受け、青年たちが中心となって普選運動を積極的に展開していた。山越もその例外ではなかった。彼は1920年4月に神川青年団の会長として普選を要求する檄をつくり、各青年会や村民に配るとともに、「現実的な行動もだいじだが、……自分たちで考えたり、批判したりするだけの自分をつくりあげなければならない」⁹⁾と考えて、杏村に講演を依頼した。その時には杏村が病氣療養中であつたために実現しなかったが、その後山越の再度の依頼により前記の講習会となったのである。

このようにこの講習会は普選運動との関係が深かった。すなわち、山越は「普通選挙制度が実施される時代が来た場合に、折角勝ち得た選挙権を、拡張された選挙民がはたして選挙権を有効に行使出来るまでに成長し得るかどうかの疑問」⁹⁾を抱き、普選実施後の準備活動としてこの講習会を企画したのであつた。この講習会は、参加者から3円の聴講料を徴収する方法がとられたが、32名の参加を得、成功のうちに終つた。そればかりか、青年たちの熱意が杏村を動かし、講習会は連続的に行なわれることになったのである。1921年2月に行われた第二回哲学講習会は、前回以上の参加者を得、山越はこのような形式の講習会に自信を持つようになった。彼は「哲学ばかりでなく、人間として均衡のとれた円満な完成を期し、倫理・法学・文学・社会学・経済・政治・宗教等々文化全般に亘る学問を総合的に勉強のできる機関を組織し、個人の充実をはかり、延いては社会の建設に意義をもたらすであろうと思われる更に大きな輪をつくることを心懸ける」⁹⁾ようになり、それが「普通選挙施行の意義を積極的に発展させる能力に、国民の文化水準を高める役に立つものになりはしないかと思われ」¹⁰⁾るようになった。そこで彼は、1921年6月頃に「総合的に勉強のできる機関」すなわち自由大学のことを杏村に相談し、杏村が積極的に賛同したことから、自由大学は急速に具体化することとなる。

山越は以上のような学習活動をするばかりでなく、1920年10月に結成された信濃黎明会に参加していた。この団体は民本主義の影響を受けた政治的な団体で、普選運動や軍縮運動を展開していた。山越はそこで修養部長という重要な地位に就いていた。普選と自由大学、普選と信濃黎明会修養部の関係を考えれば、自由大学が信濃黎明会修養部の活動となつても不思議はなかった。しかし、実際はそうならず、自由大学はあらゆる政治団体と一定の距離を保つ、独立した教育機関として創設されたのであつた。

上田自由大学は、杏村が講師の斡旋を、また山越と猪

坂直一を中心とする青年たちが経営一切を引き受けることによって、短期間に準備を整え、1921年11月1日、恒藤恭の法律哲学の講座によって、その幕を開けることとなる。

2. 自由大学の理念

土田杏村は、自由大学の理念を最も多く語っている。『信濃自由大学趣意書』中の「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が産業に従事しつつ、自由に大学教育を受くる機会を得んが爲に、総合長期的の講座を開き、主として文化的研究を爲し、何人にも公開する事を目的と致しますが、従来の夏期講習等に於ける如く断片短期的の研究となる事無く統一連続的研究に努め、且つ開講時以外に於ける会員の自学自習の指導にも関与する事に努めます。」¹¹⁾(傍点原文)という「設立の趣意」に杏村の自由大学の理念は最もよくあらわれている。杏村によれば、教育の目的は人格の自律性を確立することであり、その自律的人格は自己教育によってしか確立しないものであつた。すなわち、彼にとって教育とは自己教育であり、自由大学は自己教育を基本とする以上、そこでの教育は「被教育者本位」とならざるをえないのである。

また、彼は「教育の自律性」を主張する。彼は「教育活動は他の経済的、政治的等の活動と並立した自律的範囲であり、随つてすべての組織や制度の上に於いても其等から自律しなければならぬものである。」¹²⁾と述べ、さらに「自由大学とは何か」と題する文章の中で「教育と宣伝」「自由大学と社会運動」というテーマのもとに、そのことを具体的に語っている。彼は「教育」と「宣伝」を峻別し、「我々の大学の教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ、また社会主義的でも無く、其等の批判を自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得るを目的とするものである」¹³⁾と規定した。したがって、自由大学と社会運動との関係については、「人間は、ただ一つの社会集団にのみ加担するものではないから、自由大学の会員たると同時に、他の何等かの社会運動団体の会員たる場合はあり得る事であり、且つ自由大学は会員のかかる行動に何等の規定をも加へるものではない」¹⁴⁾が、「自由大学は教育のための一機関であり、其れ以外に何等の目的をも持つものではないから、自由大学として或る特定の社会運動に加担せず、随つて他のいかなる社会運動団体とも秘密の提携をなす如きことは過去に於て絶異であつたし、且つ将来に於いてもあり得ない」¹⁵⁾ということになる¹⁶⁾。

さて、以上のように自由大学を規定した杏村は、自由

大学と社会改造の関係をどのように考えていたのであろうか。彼は自由大学を直接に社会改造をめざす団体とはしなかった。しかし、彼は自律的人格をつくる教育による社会改造を考えていた。彼にとって、教育を抜きにした社会改造はありえなかった。杏村は、教育による漸進的改革を考えていたと言ってよいだろう。

自由大学の理念を語ったのは杏村ばかりではない。何人かの講師もまたそれを語っている。たとえば、恒藤恭は人格を高めることによる社会改造¹⁷⁾を、新明正道は教育と宣伝の区別¹⁸⁾を、タクラ・テルは「飢えたる魂に対して健全な糧」を与える機関＝「被教育者本位」の機関としての自由大学¹⁹⁾を語っている。しかし、それらはほとんど杏村の理念と変りのないものである。そのことは講師たちが杏村の理念に沿って活動しようとしていたことを示している。ただし、自由大学の理念のどの部分に重点を置いたかによって、自由大学での活動内容に変化が出てくることになる。

自由大学に参加した農村青年たちもまた杏村の考えた理念に賛同していた。しかし、彼らは杏村以上に具体的なものを自由大学に期待していた。自由大学が「被教育者本位」である以上、その期待に応えることが自由大学の任務となる。彼らは一体何を自由大学に期待したのであろうか。

自由大学と普選運動との関係はすでに述べた。自由大学は政治運動とは一線を画しながらも、よりよき社会を支える人間を育むという方法で社会改造をめざしていた。そればかりでなく、彼らはよりよき社会をめざして、もうひとつの運動をしていた。それは生産力向上などの経済運動であった。この経済運動こそが、政治運動や文化運動の根底にあったのである。

この地方が蚕業の盛んな地域であることは前述したが、そのことはこの地方の農民が不安定な生活を送っていたことを意味する。すなわち、生糸が日本の主要な輸出商品であったことから、繭価は世界経済に左右され、その変動はきわめて大きかったのである²⁰⁾。自由大学が開始された頃は、第一次世界大戦中の好況が去り、繭価に翳が差し始めていた。農村青年たちはこのような不安定な生活の中で、どのような形であれ、社会を、世界を、そして資本主義を対象化せざるをえなかった。まさに彼らは「考える農民」とならざるをえなかった。そして、この「考える農民」こそが自由大学を支えていた人々であった。したがって、自由大学の根底には、繭価の激変の中に置かれた農村青年たちの経済問題解決への熱望があったのである。彼らにとって自由大学は、普選獲得後

への第一歩であるとともに、市場経済の矛盾解決への、また生産力向上への第一歩であった。杏村が抽象的に考えた社会改造は、農村青年たちにとっては自分たちの住んでいる地域の具体的な改造であった。彼らは具体的な現実の中で「人格」を育まなければならなかったのである。

自由大学開始の頃、農村青年たちは社会改造の方向をはっきりと見据えていたわけではなかった。彼らにとって自由大学はまさに未来へむかっただけの改造の道を模索するための学習機関であった。それ故自由大学は、社会改造の手だてを提示することを期待されていたのである。青年たちは経済まで含めた地域改造の道を探る手だてとしての自由大学を考えていた。彼らにとってはこれこそが非常に重要な自由大学の理念であった。自由大学が「被教育者本位」の機関である以上、それに応えなければならなかった。農村青年たちの理念がどれだけ実現されたかが、自由大学の成否を決めるひとつのメルクマールとなろう。

3. 前期自由大学の現実

上田自由大学には、1926年4月から約2年間の中断期間がある。この中断までを前期自由大学と呼ぶこととする。

上田自由大学は一講座3円という高額な聴講料²¹⁾にも関わらず、聴講者が多かった。とりわけ、農閑期に講座を開いたことから、農民たちが多く参加したのである。彼らは講師たちを驚ろかすほどの熱心さで学んだ。この聴講者の熱心さに支えられて経営が続けられた自由大学は各地に反響をよび、1923年には福島自由大学・魚沼自由大学・八海自由大学・信南自由大学（後に伊那自由大学と改称）が、24年には上伊那自由大学・松本自由大学が26年には群馬自由大学が設立され、他地域でも自由大学設立の運動が起った²²⁾。そこで、1924年に各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が創られ、25年1月から『自由大学雑誌』が刊行された²³⁾。このような自由大学運動の拡がりにもかかわらず、上田自由大学は1926年に中断せざるをえなくなった。ここでは、その中断の原因を探りながら、自由大学の現実の理念からの乖離をみることにする。

自由大学はいかなる団体からも援助を受けず、参加者の聴講料によって経営するという原則を持っていた。この原則は、自由大学が他のいかなる団体からも干渉されない、独立した教育機関として活動するための必要条件であった。しかし、この経営方法から自由大学の財政基

表 I 前期自由大学の講座一覧

学期	開講年月日	日 数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1921.11. 1	7	恒 藤 恭	法律哲学	56	上田市横町神職合議所
	1921.12. 1	6	タカクラ・テル	文学論	68	"
	1922. 1.22	7	出 隆	哲学史	38	"
	1922. 2.14	4	土 田 杏 村	哲学概論	58	"
	1922. 3.26	2	世 良 寿 男	倫理学	35	"
	1922. 4. 2	5	大 脇 義 一	心理学	31	"
2	1922.10.14	5	土 田 杏 村	哲学概論	44	"
	1922.11. 1	5	恒 藤 恭	法律哲学	47	県蚕業取締所上田支所
	1922.12. 5	5	タカクラ・テル	文学論	63	"
	1923. 2. 5	5	出 隆	哲学史	50	"
	1923. 3. 9	5	山 口 正太郎	経済学	34	"
	1923. 4.11	5	佐 野 勝 也	宗教学	34	"
3	1923.11. 5	6	中 田 邦 造	哲学概論		"
	1923.11.12	5	山 口 正太郎	経済思想史		"
	1923.12. 1	5	タカクラ・テル	文学論		"
	1924. 3.22	5	出 隆	哲学史		"
	1924. 3.27	5	世 良 寿 男	倫理学		
	1924. 4. 1	5	佐 野 勝 也	宗教哲学		
4	1924.10.13	5	新 明 正 道	社会学(概論)		上田市役所
	1924.11. 3	5	今 中 次 磨	政治学(国家論)		"
	1924.11.21	5	金 子 大 栄	仏教概論		"
	1924.12.10	5	タカクラ・テル	文学論		"
	1925. 3.21	5	波 多 野 鼎	社会思想史		"
	1925. 3.26	5	佐 竹 哲 雄	哲学概論		"
5	1925.11. 1	5	新 明 正 道	社会学	21	
	1925.12. 1	5	タカクラ・テル	文学論(フランス文学)	30	
	1926. 1.		谷 川 徹 三	哲学史		
	1926. 2.		中 田 邦 造	哲学(西田哲学)		
	1926. 3.		金 子 大 栄	仏教概論		
	1926. 3.22	5	松 沢 兼 人	社会政策		

〔山野晴雄「自由大学の講義内容について(1)」、『自由大学研究』第2号による〕

盤が脆弱であったことが想像されよう。上田自由大学はその初めから経営が順調に行なわれていたわけではなかった。この財政基盤の脆弱さに対して、自由大学の熱心な聴講者でもあった上田市長・勝俣英吉郎から援助の申し込みもあった。しかし、政党と関係があるのではないかという誤解を受けたくないという理由で、その申し込みを断っている。この行為は、宣伝でなく教育を行なおうとした自由大学にとって、賢明なことであった。しかし、そのために自由大学の聴講料は高額なものとなって

しまい、裕富な人々だけしか参加できなくなってしまったのである。『信濃自由大学趣意書』には「何人にも公開する」とあるが、現実には有資産者でなければ参加できなかったのである。自由大学は「教育の自律性」の理念を守ろうとしたために、かえって「何人にも公開する」という理念に実質的な制限を加えてしまったのである。この理念に制限を加えたのは経済的なものばかりではなかった。自由大学での講義は「一応中学は出ているものとしてやられた」²⁴⁾のであるから、多くの青年たちをそ

の外に置いてしまったのである。

自由大学の講師の多くは大学に勤務する新進気鋭の研究者であり、自由大学における講義はほとんど大学の講義をそのまま持ってきたものであった。したがって、講義内容は相当に難解であった。山越脩蔵は、「読書百遍意自ら通ず」という気持で聴講していた²⁵⁾と語っているし、猪坂直一によれば、聴講者の三分の一位の人しか講義内容を理解できなかったということになる²⁶⁾。この講義の難解さは自学自習への援助によって緩和されるべきであったが、現実の自由大学ではテキスト使用などの努力はみられたものの、積極的な対応はなされなかった。ここにもまた理念からの乖離があったのである。

しかし、前期自由大学における最大の欠陥は、農村青年たちの自由大学の理念を実現できなかったことである。すなわち、自由大学の講義は農村青年たちの学習要求をくみとることができず、農村不況の中で未来を真剣に模索する彼らに閉塞状況打開の手だてを示すことができなかったのである。教育は被教育者の学習要求をくみとることからしか始まらないことを考えると、自由大学のこの欠陥はきわめて重大なものとなる。この欠陥がある限り、自由大学は教育として十分に作用したとは言えないのである。

農村不況の現実がきびしくなればなる程、青年たちの自由大学への期待は大きくなる。彼らが自由大学で現実を打開する糸口をつかみたいと願うのは当然であろう。その時に「読書百遍意自ら通ず」の講義では「被教育者本位」の教育が行なわれていたとは言えない。このような講義は、大学教育を知らない青年たちの上級学校へのあこがれを満足させることはできても、その講義内容と実生活との遊離が生じ、「産業に従事しつつ」学ぶことの意味を失わせることになる。農村青年たちは最初、現状打開の糸口を既成の大学の学問に期待した。そして、彼らの中には「学問に対する自信ができた。ああこういうものが学問か、各大学で教えているのはこういう程度のものか、では自分も追いつける」²⁷⁾という気持を抱く者も現われた。このこと自体はきわめて意義のあることである。しかし、彼らが期待した既成の大学の学問には問題があった。すなわち、タカクラの「勤労者大衆とむすびつき、いつもじぶんの研究態度をその立場から検査していない学者は、やがて、学者としての成長がとまってしまうということは、今日わかりにくいことではない。そういうことがほとんど問題にされていなかった。」²⁸⁾という言葉が象徴するような学問の状況があり、その状況の中で純粋培養された既成の大学の学問は、聴講者たち

の生活を前提とする学習要求に合致するものではなかった。自由大学が家事を継がなければならない青年たちの高等教育に対するあこがれを満たすために設けられたものでない以上、そこでは、被教育者の学習要求に基づく教育が行なわれなければならなかった。しかし、講義は聴講者が講師に希望を出すというよりも、講師の得意とするところを聴講者に計って行なわれており、講師不足の折から、聴講者たちが卒直に自分の希望を述べるなどほとんどできなかった。自由大学の講義に不満な者は、そこを去る以外になかったのである。聴講者に対して何の強制力も持たない自由大学は、聴講者に資するものを提供することによってしか存続できない。そして、そうするためには、講師が聴講者の現実を知り、そこにある要求を把握し、それに合わせて課題を彼らに提示し、それを解決する道とともに模索するような教育、すなわち課題提起型の教育²⁹⁾がなされなければならなかった。しかし、実際に講義された学問は、いわば閉じられた学問であり、それが聴講者たちに投げかけられることによって吟味されることはなかった。そこでは教える者は教える者として、また教えられる者は教えられる者として、その位置は永遠に変わらないかのごとく、それぞれに位置づけられてしまい、教える者が教えられる者となり、教えられる者が教える者となるという相互作用の中で教育が行なわれることはほとんどなかったのである。

以上のような欠陥はほとんど改められることなく、自由大学は学期を重ねた。これでは、農村不況の中で次第に身銭を切ることが困難になっていった青年たちが去っていくのは当然であった。聴講者の減少はただちに自由大学の経営の破綻を意味した。また、自由大学の理論的指導者土田杏村の病気や数人の講師の留学がそれに拍車をかけ、自由大学は1926年、中断せざるをえなくなってしまったのである。

3. タカクラ・テルの教育的営為

上田自由大学は1928年に再建された。この再建された自由大学を後期自由大学と呼ぶことにする。後期自由大学においても、講義中心的で、聴講者の自学自習への援助が不十分であったなどの欠陥を有していたが、前期自由大学が抱えていた聴講者の学習要求と講義内容との遊離という重大な欠陥を克服しようとする努力がみられる。

自由大学の再建は、小県郡連合青年団の幹部・山浦国久、堀込義雄らが中心となってなされた。当時、小県郡連合青年団は長野県連合青年団の第七回研究大会に「近時

表Ⅱ 後期自由大学の講座一覧

学期	開講年月日	日 数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1928. 3. 14	3	タカクラ・テル	日本文学研究	60	上田図書館
	1928. 11. 19	3	三 木 清	哲学論（経済学の哲学的基礎）	25	上田市海野町公会堂
2	1929. 12. 6	4	タカクラ・テル	日本文学研究	28	〃
	1930. 1. 24	3	安 田 徳太郎	精神分析学	44	〃

〔山野晴雄「自由大学の講義内容について(1)」、『自由大学研究』第2号による〕

農村経済の行詰れる根本的原因及之が解決方法如何⁸⁰⁾という議題を出している。この議題の提出理由は「農村問題はかなり多く政治家と学者、実際運動者等に依り研究論議されているにも係らず、農村経済は益々行き詰まりつつある状態である。之が解決者は机上の学者政治家ではない。実生活の上に体験を持つ吾々自身でなければならぬ⁸¹⁾」と言っている。ここには問題を主体的に解決しようとする青年たちの態度がよくあらわれている。そして、彼らは実際に青年団自主化運動、青年訓練所廃止運動、不況対策運動などを行っていた。このように未来を模索するばかりでなく、積極的に状況打開へ動きはじめていた青年たちが自由大学に期待することは、その社会的実践の「思想的な根拠を求め⁸²⁾」ることであった。後期自由大学は、このような青年たちの生活に根ざす学習要求に応えるべく設立されたのであった。

上田自由大学再建を呼びかける手紙には、ガリ刷りの『信濃自由大学趣意書』、土田杏村『自由大学へ』、恒藤恭『信濃自由大学聴講生諸君』、新明正道『自由大学の精神』が同封された。このことは後期自由大学が理念として前期自由大学を引き継ごうとしていたことを示している。後期自由大学に全面的に協力したタカクラ・テルは、杏村が自由大学のことを相談した最初の講師であり、彼は杏村の考えた自由大学の理念を十分に理解していた。そればかりでなく、彼は1923年の秋に「骨お埋めるつもり⁸³⁾」で上田市郊外の別所温泉に移り住み、農村青年たちと交流する内に、彼らが自由大学に何を期待しているのかも具体的にわかるようになっていった。両者を理解したタカクラは、「教育の自律性」に配慮するとともに、「被教育者本位」の教育を行なう努力をしていた。以下で、自由大学全期間を通してのタカクラの活動をみることによって、後期自由大学における教育の質的發展を明らかにしていこう。

タカクラが自由大学の回想を述べている中で、次のような部分が注目される。

わたしは、自由大学の会員に、文学を中心に、少しは教えもしたが、じっさいは、それらの会員から教わったほうがはるかに多かった⁸⁴⁾。

わたしのばあいは、ツチダその他の指導者と根本的にちがう点がありました。つまり、それら自由大学の会員たちにわたしが教えた点より、それらの労働者、農民その他からわたしが教わった点が比べものにならないほど多かったんです⁸⁵⁾。

このような回想を残している講師はタカクラひとりである。彼にとって自由大学は自分自身の学びの場であったのである。

タカクラは「自由大学随一の人気講師⁸⁶⁾」であった。彼の出講回数は最も多く、上田において7回、他の自由大学も合わせると18回にもなる。しかも、一回の講座における聴講者の数も他の講座よりも概して多い。前期自由大学における彼の講義の内容は、その著『我等いかに生くべきか』や『生命律とは何ぞや』によって知ることができる。その中で彼は「唯今の社会運動というものに、非常に同情を持ち、また、真実なる要求からその運動に携わっている人たちにたいして深い尊敬を払う者であります。しかも、それにもかかわらず、私は、今、私自身の問題としてこの社会問題というものをもっとも重大なものとは考えていない。少くとも、私はそれを自分の生活の全部とし、あるいは生活の中心としていないのであります。それは、いったい、どういうわけでありましょうか？すなわち、そこにこそ、芸術なんぞの生まれてくる理由があるのだと、私は考えているのであります。』⁸⁷⁾と述べている。この芸術至上主義的考え方こそ、創作をめざしていたタカクラの心情であった。しかし、この芸術至上主義は深刻化する農村不況の中で生活する青年たちにとって、未来を拓く有効な道ではありえなかった。「わたしは、ロシア文学・フランス文学・イタリア文学などの代表的な作者の作品を具体的に紹介して、文学ゼンたいにたいする見とおしをそれらの労働者にもって

らおうと思って、始めました。ところが、そうしてやっていくうちに、それらにたいする会員たちの驚くような熱意に、すっかり圧倒されると同時に、会員たちは別のもっと熱烈な要求をもっていることを、わたし自身がひしひしと感じないわけにいかなくなりました。』³⁹⁾というタカクラの回想は、自らの講義が農村青年たちの期待に十分に応えていないことの自覚をあらわしている。このように聴講者の要求、すなわち「飢えたる魂」に敏感であったタカクラは、農村青年たちが自由大学に社会改造の手だて、具体的には農村改造の手だてを期待していることを知り、自分自身もそれを考えはじめるのであった。彼は1923年に大原幽学のことを知り、農村共同組合こそが農村改造の道であると考えようになった。これが後に大原幽学研究となり、さらには実際の活動として浦里村の越戸農業共同経営組合への関与³⁹⁾となるのである。このように、タカクラは聴講者の学習要求をくみとり、それを自らの研究に生かしていった。タカクラは教えることを通して教えられたのであった。そこでは相互作用のある教育が実践されたと考えよう。

また、彼は農村青年たちと交流する中で、自分の専門である文学のあり方も再考しはじめるのである。タカクラの作品は都会のインテリに読まれはしたが、彼のまわりにいる農民たちにはほとんど読まれなかった。その状況はプロレタリア文学に関しても変わらなかった。彼がその原因を探ると、そこには文字や言葉がインテリの特権になっているという事実があった。そこで彼は大衆のための文字・言葉を考え、国語国字研究をしていくことになる。「タカクラ・テル」という表記方法もその研究に基づいたものである。彼のこの研究は、自由大学の聴講者の学習要求をくみとったものというよりは、自由大学に参加できない多くの農民たちの要求に基づいたものであった。彼が一般の農民の要求にまで踏み込んでいったことは、誰れにでも開かれている自由大学の理念に合致している。彼は「飢えたる魂」に固執したために、自由大学から出発して農民の中に入った。そして、これは自由大学が進まなければならない方向であった。したがって、タカクラの新しい研究こそが自由大学の理念に最も合致する内容を可能態として持っていたのである。

以上のように、タカクラは教えることによって学び、聴講者の要求に合う講義をめざした。タカクラにとって自由大学は重要な活動拠点であった。残念ながら彼のような講師は他にいなかった。土田杏村とても自由大学を中心拠点としていたわけではない。杏村が山越の要請で上田に来たのは、自らが1919年、京都に設立した日本文

化学院の普及が目的であり、その後も彼の拠点は日本文化学院であった。また、他の講師たちも自らが勤務する大学が拠点であり、自由大学はいわば片手間仕事であった。これでは自由大学に参加する人々の学習要求を的確に把握するのはむずかしかった。そして、もちろん、そこには教えることによって学ぶという態度は存在しなかった。タカクラのみが聴講者の要求を把握し、それに応え、同時に教えることによって教えられたのであった。タカクラは自由大学を媒介として思想的に変化した。自由大学はタカクラに教育として作用したのである。そして、タカクラの努力によって自由大学は聴講者に教育として作用したのである。大学教育に対するあこがれを満たすことは厳密には教育活動とは言えないのであるから、このタカクラの努力があつてはじめて自由大学は教育を行なったことになる。まさにこれこそが自由大学の質的発展であった⁴⁰⁾。

後期自由大学において「被教育者本位の教育」は実現された。それでは、自由大学のもうひとつの重要な理念であった「教育の自律性」、具体的には「教育と宣伝の区別」「自由大学と社会運動の関係」はどうであっただろうか。

後期自由大学が開かれていた時期の状況は人々を実践に駆りたてずにはおかないほどきびしいものであった。後期自由大学の中心であったタカクラは、1928年4月、上小農民組合連合会を結成し、29年3月に山本宣治が暗殺されてからは、コミニストとしての意図を固めたと言われている。タカクラの「多くの共産主義者、とくにインテリ出の共産主義者が、思想をとらえるところから出発して、運動にはいったのに反して、私は、運動にはいって、それから、共産主義の思想をえた。』⁴¹⁾という言葉は、彼の歩みをよくあらわしているが、この歩みは彼にマルクス主義を教条的にとらえ、それを民衆に宣伝するという方法を許さなかった。また、自由大学の講義において、タカクラは「心の奥底に秘めたコミニストの考えを、できるだけ外にあらわに出さないようにし」⁴²⁾ていたと言われる。これらのことから、タカクラには「教育と宣伝の区別」の自覚はあったものと思われる。

前述したように、後期自由大学は積極的に社会運動を展開していた青年団の人々と関係が深い。さらに、井沢譲や井沢国人などの農民運動に携わった人々の参加もみられる。しかし、自由大学は組織として教育活動以外の活動をしてはいない。農村青年たちは社会運動をする中で生じた疑問や迷いの解決に役立つような知識を得たいと考えて、自由大学に参加したのである。自由大学は、

結果として側面から社会運動を支えるものとなったが、社会運動を展開したわけではない。したがって、杏村の「自由大学と社会運動の関係」の理念は実現されているとみることができよう。自由大学は、後期においても、あらゆる団体から独立した、自由な教育機関であったのである⁴⁸⁾。

後期自由大学は、自由大学の理念を前期以上に実現した。それに最も貢献したのはタカクラであった。タカクラの努力によってはじめて自由大学は教育として機能したのであった。しかし、後期自由大学も、世界恐慌による農村生活の一層の困窮化、官憲による弾圧、さらにはタカクラが自由大学運動の限界を超えようとしたことなどによって、1930年1月の安田徳太郎の講座を最後にその幕を閉じるのであった。

結 語

上田小県地方の蚕業を背景として成立した上田自由大学は、最後まで民衆自身によって経営された。大正デモクラシー期に歴史の表面にあらわれた民衆の学習要求は、多くの場合体制側からの働きかけに吸収され、本当にはその要求を実現することができなかった。しかし、自由大学は最後まで民衆の学習要求を実現しようと努力し、国家のとった上からの教化政策に同調することはなかった。

私は自由大学の限界を、その理念の中にではなく、その現実の中に見い出した。すなわち、聴講者の学習要求が講義の中に反映されなかったことに最も問題があった。自由大学は民衆の学習要求を基盤にしたまったく新しい教育組織であった。しかし、そこで講義されたものは既成の大学で育まれた学問であり、民衆の要求から生まれたものではなかった。民衆は自由大学というきわめて教育的な組織をつくりながらも、それに既成の学問を望んでしまった。自由大学はその理念を学問自体にまで及ぼすべきであった。そうすることによって、自由大学は新しい学問をつくり出し、かつ教育活動としても十分に機能することになったであろう。後期自由大学にはその方向がみられた。そして、それはタカクラの努力によるところが大きいことはすでにみた。しかし、彼とても自由大学の理念を完全に実現したわけではなかった。また、彼が自由大学運動の限界を超えた、自由大学に参加できない人々の学習要求に基づく教育機関を構想・設立しなかったことは、きわめて残念なことである。しかし、我々はタカクラに代ってそれを構想しなければならない。まさにその作業をすることは、現代に自由大学の遺

産を発展的に継承することになるであろう。

註

- 1) 宮坂広作「戦前における社会教育運動の遺産について」、『月刊社会教育』1962年11月号・12月号・1963年2月号・3月号。引用にあたっては『近代日本社会教育史の研究』1968年に依った。
- 2) 宮坂前掲書 460 頁
- 3) 自由大学運動研究史に関しては、山野晴雄「自由大学研究の現段階と課題」、『自由大学研究』第2号を参照されたい。
- 4) 上田自由大学という名称は、1924年2月に信濃自由大学が改称したものである。したがって、上田における自由大学はふたつの名称を持っている。この論稿では便宜上、「上田自由大学」を用いる。
- 5) 山野晴雄「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動——上田自由大学を中心として——」、『季刊現代史』第8号など。
- 6) 上田小県誌刊行会編『上田小県誌』第3巻社会篇 1968年 495 頁参照
- 7) 山越脩蔵氏の口述、1966年7月、伊東正代「自由大学運動史研究序説」、『社会問題研究』第4号56～7 頁より所引
- 8) 山越脩蔵「土田杏村の手紙と上田自由大学」、『信州白樺』第29号 7 頁
- 9) 山越脩蔵「上田自由大学の頃(二)」、『信州白樺』第8号42頁
- 10) 同上
- 11) 『信濃自由大学趣意書』1921年。上木敏郎「土田杏村と自由大学運動」、『教育労働研究Ⅰ』195頁。以下の『信濃自由大学趣意書』からの引用はこれによる。
- 12) 土田杏村「自由大学に就て」、『信濃自由大学の趣旨及内容』1923年 2 頁
- 13) 土田杏村「自由大学とは何か」、『自由大学パンフレット・自由大学とは何か』1924年 5～6 頁
- 14) 同上 9 頁
- 15) 同上
- 16) “自由大学と社会運動”の節は、社会主義団体 LYL の検挙事件を念頭において書かれていると思われる。杏村が自由大学と社会運動との関係を否定したことは、結果として権力に加担することになってしまった。この結果は、杏村の社会認識、とりわけ権力認識の甘さが招いたものである。しかし、教育運動としての自由大学のとる道は、杏村の示した道以外にはなかったように思える。自由大学は教育機関として機能することによって、社会運動に資する可能性を十分に有していたことを一言付しておきたい。
- 17) 恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君へ」、『信濃自由大学の趣旨及内容』
- 18) 新明正道「自由大学の精神」、『自由大学パンフレット・自由大学とは何か』

- 19) タカクラ・テル「自由大学に就て」、同上。タカクラ・テルの名前の表記方法は、この他に高倉輝、高倉テルがあるが、この論稿では「タカクラ・テル」に統一する。
- 20) 前掲『上田小県誌』488頁参照
- 21) 猪坂直一氏によれば、現在の10,000円ほどに相当する。「猪坂直一氏との対談」、『自由大学研究』第2号57頁参照。以下「対談」と略
- 22) 北海道、青森、京都など。『自由大学雑誌』第1号第5号の「編集部より」参照
- 23) この雑誌の購読者は全国29道府県及び台湾にまで及んだが、経営難のため11号を出したにとどまった。
- 24) 「対談」、『自由大学研究』第2号62頁
- 25) 1979年9月2日、自由大学研究会第7回夏季研究例会での山越脩蔵氏の談話
- 26) 「対談」、『自由大学研究』第2号61頁参照
- 27) 同上58頁
- 28) タカクラ・テル「イデ・タカシくんと結びつき」、『出陣著作集』月報2・2～3頁
- 29) 課題提起型教育に関しては、Paulo Freire, *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin Books, 1972 (小沢有作、楠原彰、柿沼秀雄、伊東周訳『被抑圧者の教育学』1979年) 参照
- 30) 山浦国久『長野県青年団発達史』1935年102頁
- 31) 天田邦子「上田自由大学運動前後における上小地方青年層の動向(要旨)」、『自由大学研究』第1号39頁より所引
- 32) タカクラ・テル氏の口述、1972年8月14日、山野晴雄「昭和恐慌と自由大学運動」、『長野県近代史研究』第6号19頁より所引
- 33) タカクラ・テル「わたしのあるいてきた道」、『人民文学』1951年5月号42頁
- 34) タカクラ・テル「自由大学の思いで」、『土田杏村とその時代』7・8合併号7頁
- 35) タカセラ・テル「自由大学かんけいの書簡集」、山野晴雄編『伊那自由大学関係書簡(横田家所蔵)』1973年
- 36) 猪坂直一『枯れた二枝』1967年48頁
- 37) タカクラ・テル『タカクラ・テル名作選 文学論・人生論』1953年102頁
- 38) タカクラ前掲書簡集
- 39) 前掲『上田小県誌』496～7頁参照
- 40) 従来の研究は、後期自由大学と地域変革との結びつきを高く評価している。たしかに後期自由大学での学習は、地域変革との関連は深くなっている。しかし、教育運動として後期自由大学を評価する場合、本文で述べてきたように、被教育者の要求に合致する教育が行なわれたことが最も重要なことであると考ええる。
- 41) タカクラ前掲『文学論・人生論』8頁
- 42) 渋谷定輔・蒲生紀生「上田自由大学のころ(下)——山越脩蔵、猪坂直一氏に聞く——」、『月刊社会教育』1976年12月号80頁
- 43) 後期自由大学の講座はマルクス主義の影響を受けている。しかし、これを以って、自由大学を左翼運動の宣伝機関とすることはできない。これらは聴講者たちの生活に根ざす学習要求に合致した講座であったと私は考える。